



# 杉原千畝の決断

株式会社岐阜新聞社  
代表取締役社長 碓井 洋

白川郷の合掌造り集落は岐阜県の世界文化遺産として知られ、昨年は百七十二万人(うち外国人は二十六万人)の観光客が訪れました。最近では美濃市の手漉き和紙がユネスコ無形文化遺産に、岐阜市など長良川流域の「清流長良川の鮎」がFAO(国連食糧農業機関)の世界農業遺産に認定されるなど、県内で世界遺産が増えています。これは自治体が多様な地域資源、伝統文化を見直そうという地道な取り組みの成果であり、地方創生の一翼を担う動きと言えるでしょう。

こうした観光や伝統文化ではありませんが、岐阜県八百津町では「命のビザ」で知られる町出身の外交官杉原千畝(すぎはら・ちうね)の資料をユネスコの世界記憶遺産に登録しようという機運が盛り上がっています。

杉原は第二次世界大戦中、ナチスドイツの迫害から逃れたユダヤ人難民に日本通過ビザを発給し、約六千人の命を救った逸話で知られています。彼はリトアニアの日本領事館に赴任していましたが、当時、日本とドイツは同盟関係にあり、ユダヤ人を助けるのは裏切り行為だとして外務省はビザ発給を許可しませんでした。しかし、杉原は人道的な立場から彼らを救う決断をしました。杉原の手記によれば、腕が腫れ、万年筆が折れても、食事の時間も惜しんで懸命にビザを書き続けたといえます。昨年公開された映画「杉原千畝」によって、人道に貢献した彼の名前は国内の若い世代にも広く知られるようになりました。

いま世界では紛争地の中東から難民が欧州に殺到し、シリアだけでも昨年末までに四百三十万人もの難民が国外に逃れたと言われます。歴史を振り返り、同じ日本人として、杉原の決断の意味をとらえ直す時ではないでしょうか。

八百津町は五月にユネスコの世界記憶遺産に登録申請し、来年八月頃の決定を目指します。ユダヤ人に発行されたパスポート、二千百三十九人の名前が記載されたビザ・リストなど関連資料が提出されます。岐阜県もリトアニアに職員を派遣します。先人の偉業を発掘し、後世に伝えていくのも新聞社の使命です。世界記憶遺産の登録に向けて、紙面でも地元のマードを大いに盛り上げ、できる限りの応援をしていきたいと思っています。